

《記録》

女性史研究者・井上とし氏を囲んで

高度成長史研究会（第5研究代表者 庄司俊作）

はじめに

庄司俊作 それでは研究会を始めたいと思います。今日は女性史研究者の井上としさんをお招きし、ご著書『鐘紡長浜高等学校の青春』（ドメス出版、2012年）にちなんだお話をいろいろおうかがいしたいと思っています。井上さんは京都女子大学を卒業され、鐘紡長浜高等学校（以下、鐘高と略す）の教師をされていました。同校は、紡績女子労働者（男子を含む）の教育を目的とした私立定時制高校であり、鐘淵紡績株式会社（以下、鐘紡と略す）長浜工場内に付設されていました。1949年、文部省の認可を受け、以来1988年の閉校まで約40年の歴史を刻みました。井上さんは同校に1953年4月から56年9月までの3年半、教員として在職されています。本書の「あとがき」で書いておられます。「本書を思い立ったのは2007年。予想外の時間が経過してしまった。こうまでして書こうとする思いは何ゆえか、自問を繰り返す日々であった。いつも明確な答えは出ない。あるのは、あの女子労働者の働く形態、労働の後に教科書と向き合った鐘高生として姿を残したい、忘却の歴史の彼方に消えさせたくないという『思い』が切れない糸のようにつながっていたから、そうとしかいいようがない」（289頁）。本書には鐘紡で働き学ぶ女子労働者の姿が生き生き描き出されています。鐘紡と鐘高の関係や、会社内における大学での「エリート」社員と鐘高卒業生のような一般労働者の階層構造なども、戦後の紡績会社の問題として興味深いものです。そのあたりのお話を今日はじっくりおうかがいできればと思っています。ではまず井上さんから切り出しのお話をさせていただきます。よろしく願いいたします。

1 井上とし氏の報告

1.1 出版のいきさつと動機

井上とし 私の拙い本を採り上げていただきましてありがとうございます。この出版から2年になります。この本で把握しきれていない点がたくさんありますが、皆さまからご指摘なり、ご教示をいただきたいと思います。名称についてですが、「女工」というのは、『女工哀史』以来、蔑称になっています。戦後、嶋津千利世の『女子労働者 戦後の綿紡績工場』（岩波新書、1953年）という本が出てから「女子労働者」という言葉が定着しまして、鐘紡の労働組合の人たちも「女子労働者」といいます。女子労働者の状態は説明の中で順次、補っていききたいと思います。レジュメにそってお話いたします。

鐘紡長浜高等学校（鐘高）に就職したのは1953年、京都女子大学を卒業してすぐです。1956年まで3年半しか在職していません。就職は塚田満江（元京都女子大学教授、ペンネームは黒田しのぶ）先生との関係があります。先生のところへよく伺っていました。旧制京都女学校には本科と商業科がありまして、商業科の国語の先生をしておられ、小説を書く指導もされていました。私は本科で、授業では習ったことはありません。その先生が鐘紡長浜工場に講演に呼ばれて、人事課長（鐘高教頭）に依頼されたわけです。その頃の女子大の就職状況はひどい氷河期でした。私は教師が志望ではありませんでしたが、自宅通学して京都女子学園に通っていましたので、家から出たい気持ちもあって就職した、でも・しか先生のはしりではないかと思います。就職の前に面接と見学にいきました。長浜工場は絹織機や綿織機、加工品といろいろな製品を作っていますが、紡績工場で典型的なのは綿織機だと思います。綿織機工場は体育館をいくつも集めたような広いところに機械が並んでいまして、女子労働者たちが綿埃の中で働いている。それを見て驚愕しました。今考えますと、そこで驚愕する必要はなかったと思うのですが、私自身、学徒動員の経験があり、女学校3年生で終戦の年の半年間、京都市太秦の三菱の工場で旋盤工やボール盤工をしていました。彼女たちより条件の悪い労働だったわけです、食料もない時に。けれどもこの時は戦後8年も経った平時の年若い女性の労働実態に大変な驚きを覚えました。

就職してから、彼女たちは経済的な理由などで非常に差別されているなど感じました。女性差別観の強い時期でもありますけれども、職制、経営的な立場にたつ人は全部男性です。女性の月給者は教員2人、その他に現場の古い女子労働者が4、5人いた

だけです。「月給者だけ集まれ」ということがありまして、その時に確認しました。ほとんどの女子労働者は工場の経営・管理にタッチせず、女性の職制は現場の「見回り」しかいない。なぜこんなに差別されているか、疑問をもちました。

鐘高は、大変小さな学校で3教室があるだけです。そこに職員室もあって、ほとんど寄宿舎の施設を利用する学校でした。生徒は全部、長浜工場の従業員で紡績女子労働者です。なぜ高校へいけなかったのか。親もとへの仕送りもしている。向学心があるのに高校にいけない子どもたちに出くわして、社会的な矛盾を初めて経験したというか……。

学校の中に創立以来の記録が残ってしまして（回覧した和綴じ文書類は執筆中に偶然出てきたものですが）、職員室の戸棚にありました。それを読んで、どうしてこんな小さな学校を、会社が作っておきながら何度も潰そうとするのか（経過は本書中にあります）、普通の学校では考えられないことを知りました。もともと何となくものを書きたいという気持ちがありましたので、退職する時に記録類を写して、当時はコピーがありませんので、それを50年余りもっていたわけです。執筆に至った経緯は「あとがき」に書いています。ともかく捨てずにいろんなものを残していました。

その間、何をしていたのか。私は40歳半ばから京都の婦人運動史にかかわってしまして、それに時間をとられて長い間放置していたのですが、『近江絹糸人権争議の研究』（部落問題研究所、2009年）を書いておられた上野輝将さんと出会ってすすめられたのです。5年ほどかかっているいろいろ調べて、書いたつもりです。

1.2 紡績、鐘紡についての基礎的解説

鐘淵紡績は今は無くなりましたので、ご存じない方がいるか思います。明治になって紡績産業の大工場ができてきました。それ以前は近辺から労働者を集めていたのが、大工場になってから、地方の若い女性を大量に雇うようになりました。戦後はナイロンの発明などがあって天然繊維がだめになり、紡績会社はほとんど合繊に生産を変えています。化学工業になったわけで、生産の内容だけではなく、労働者の質も変わってきます。高度経済成長期に入った頃、当時はまだ過渡期で戦前と同じような形態が残っていたから、年少女子労働者の不足が出てきます。「金の卵」といわれた時代です。その後、合繊が主流になり70年代になると、女子労働者は姿を消していきます。

鐘紡という会社は潰れましたが、私の就職した頃は大変なエリート会社でした。よもや鐘紡が潰れるとは思わなくて。卒業生で、近在の中学から鐘紡に就職が決まった時に、

中学の先生から「日本は滅びても鐘紡は滅ばないからよかったね」といわれています。それくらいすごい会社だったのです。

戦争中に大きくなりすぎて海外、とくに中国へたくさん工場を作っています。子会社も含めて283カ所もあり、大コンチェルンを成していました。帝国主義とともに発展していった会社だといえます。終戦と同時に海外工場はすべて無くなり、国内に38カ所ほどが残っただけで、私が就職した頃は大変な借金を抱えていました。

1.3 紡績企業と教育、鐘高の特色

着任当時、工場の中の独立した高校という扱いはされていました。しかし、全く独立していたのかどうかを考えると、労務管理（労務統括機関）の一部としてあったのではないかと思います。本社は高校が創立して間無しに、2回も各種学校（2年制の資格のとれない自由な講座を主体とする学校）に変えようとするのです。そういう経緯からみても、会社は労務管理の一部と考えていたといえます。

どうして学校を設立したのか。低賃金の年少女子労働者を雇わなければいけないことと、それに対し多少は企業の社会的責任（当時、鐘紡では「企業の社会的機能の自覚」という用語を使用）意識があったからでしょう。本来、企業と学校教育は矛盾する関係にあると思うのです。しかし、そこにプラスして企業の社会的責任を感じたこと。この時期の経営者の中にヒューマンイズム、とくに戦後民主主義の思想があって、年少労働者に同情というか、何とかしないといけないという意識が働いたといえます。鐘紡が高校をつくったのは長浜1校だけでした。それほどたくさんのお金はありません。戦争中、青年学校がどこの工場にも設置されていて、そこに付随した施設があったので、設備としてもそれほどたくさんのお金はかからないのに、他はどこもが経費を考えて高校は作らないで各種学校にしています。

その後、高校進学率が向上して高校教育は普通になってきますので、十大紡や中小紡

写真1 鐘紡長浜高等学校と同長浜工場



上 校舎全景 下 工場正門
出所：校舎全景は『あけほの』1954年3月、No.7、
工場正門は井上とし、前掲書より。

でも各種学校だけでは人が集まらなくなります。それで地元の公立高校の定時制と話しあって、定時制は1部制が主流なのに、紡績の実態にあわせた2部制の定時制を作る。公立または私立高校の方に適応してもらっています。鐘紡の場合、他工場はNHK学園高校（通信制）に一括して入学することになります。また、紡績会社が集まって（日清紡などが中心）、全寮制の向陽台高校を作ります。しかし、全員を寮に入れるわけにいかないのので、各工場に学校を設けさせ、高校から教師が出向いて授業をする、これを向陽台方式といいます。また、大阪府立貝塚隔定制高校のような過酷な定時制も公立で作っています。これが紡績に働く女子労働者の教育の実態ですが、これをもって教育の平等化に役立ったといえるかどうかは論議のあるところだと思います。本書には生徒たちのために、せめてそういたい心情から平等化、平準化に存在意味があったと書いていますが……。

1.4 鐘高の特色

鐘高は正規の文部省の認可を受けて定時制高校として出発しています。一応は独立した形をしていました。私の在職中と少し後までは自由入学制、4年生まで含めて150人くらい。寮に800人いますからほんの一部です。学校は自由な雰囲気です。1956年に退職して2、3年後、全入制になります。年次ははっきりわかりません、高校史に書かれてないので。聞き取りでは、1958年頃、全入だったということです。全入にした企業の目的は、年少女子労働者を獲得することです。まだ高校進学率は低かったので、働きながら学校にいけることが、高校にいけない中学生たちの受け皿にはなったと思います。

女子労働者は、『鐘紡長浜高校史』（1988年、以下『鐘高史』と略す）の寄稿文を見ても、働きながら自分の意思で学校を出たことに誇りをもっています。『鐘高史』に文章を寄せる人は意識も高かったのだらうと思いますので、ごく一部でしょうが。実際に知る卒業生たちも、とても矜持をもって見えるように見えました。私がこの本に「貧しかった」と書いたことは、心理的な反発を与えたようです。一般に工場から定時制高校に行く場合、通学がしんどいうえに、夜間のみが多いので紡績の2交替制では隔週にしか授業が受けられません。その点鐘高は工場の中に学校があるので、まず通学しやすい条件だったといえます。「正規の学校であるので大学に受験できたことを感謝している」という作文もたくさんあります。この程度の学校であっても、とにかく高校にいきたい、勉強したい人たちにとってはいい学校があったということにはなるかと思います。この本を書きながら卒業生の聞き取りもしましたが、集まってくる人は、その後の人生で普通の

安定した暮らしができた、いわば成功例が多いので、全体の判断をすることは不可能ではないかと考えています。私の教えた生徒たちの卒業後は高度経済成長期に入っていて、働きやすい、生活しやすい時代でしたから、学校のことを懐かしみ、「よかった」といえるのです。

なぜ1校だけが存続したのか。会社としては潰したかったのに残ったのです。

鐘紡では、それぞれの工場には割と独立性があり、本社の言いなりではない部分があります。もちろん、大きなところは本社の言いなりですが、裁量できる部分がありました。「学校は残さないといけない」とか「長浜工場の伝統である」という意思が社員の間にも生徒にも引き継がれていたといえます。鐘紡としてはテストケースとして作ったつもりが、こういう意思のおかげで継続したのでしょう。何よりも女子労働者に学習意欲があったことと、会社側が高度経済成長期の求人对策に活用できた面が相互に作用して存続したのではないかと考えられます。また、高校進学率が向上し、高校へいくのがあたりまえになり、鐘高も全入制にして、だんだん高校そのものを会社としても潰せないところに来たともいえるでしょう。鐘紡の家族主義、温情主義という言葉が戦前からあり、社内でもよく口にします。実態はともかくとして、その証明のような一つの資産として、慈恵的な温情主義であやうく存続できた面もあると思います。

ところが、世の中で高校全入が実現してきた頃には、紡績そのものが化学繊維になり、70年代になると綿紡績は東南アジアに移ってしまいました。そのことについては多田とよ子さんの本（『明日につなぐ——仲間たちへの伝言』ドメス出版、2004年）にも書かれています。フィリピン、タイへと、「女工哀史」と共にアジア進出をしていきます。鐘紡は戦前のことがあり中国にはいきにくいので、60年代以後になるとアフリカなどに工場を作ります。女子労働者が減ってくるのは1950年代後半からですが、会社の事業内容そのものも変わってきて、長浜工場も織機工場から染色加工工場になり、中卒の採用者そのものがなくなって88年閉校に至るわけです。

全入制になった鐘高ですが、工場へきて高校があるから皆が喜んで入るというものでもないですね。鐘紡に採用されるにはある程度選抜はしていますが、中学を出たら勉強なんかしたくない、高校にはいきたくないというものもあり、単位が足りない生徒をどうするかということでは先生方も苦労したようです。

1.5 記録の意味

いつかこれ（小著）を書きたいという気持ちがあって記録類は保存していましたが、た

同志社大学人文研 高度経済成長史研究会

2014・5・27

『鐘紡長浜高等学校の青春』を書いて

井上とし

1. いきさつ

- ・就職—1953年4月～1956年9月（3年6ヵ月）（58年前）
コネ，でも・しか先生

2. 動機

- ・紡績女子労働者の労働実態に驚愕
- ・二つの流れ—企業社会の階層別差別（経営者と労働者）—身分
経済的理由による人間の分別—社会構造への疑問
- ・鐘高存統の困難な経緯—企業内定時制高校の意義を理解しない企業への疑問
この実態を将来，記録に残したいという「思い」だけで資料を保存してきた。

3. 基礎的解説

- ・紡績について
 - ：紡績元年 1867（慶応3） 鹿児島紡績所創設
 - ：1887（明治20）大阪紡績設立—大規模紡績工場の始まり
以後紡績会社多数設立される。（「日本の産業革命は紡績から始まった」）
 - ：1935（昭和10）繊維工業最盛期，1937綿布輸出世界一。
買収，合併が繰り返され，大紡績会社が形成される。
 - ：「紡績の歴史は操短の歴史である」（『紡績』1956）。
 - ：農村出身の年少女子労働者の大量採用，低賃金（家計補助的低賃金），短期就労。交
替制労働（明治年代—14時間労働。1884（明治17）年頃から12時間労働の2交替
制）（1902（明治35）工場法案—施行1916（大正5）。（1929（昭和4）婦人及び少年
の深夜業禁止）
 - ：大寄宿舎制
 - ：戦後は天然繊維から合繊へ—生産内容変化，多角化—大量の紡績女子労働者不要（70
年代に消える）
- ・鐘紡について（三井財閥系）
 - 1887（明治20）東京綿商社設立
 - 1888（明治21）鐘淵紡績株式会社 中上川彦次郎
 - 1900（明治33）武藤山治全支配人（専務）近代化と拡張（海外にも）
福利厚生策を進め，世に鐘紡の温情主義，家族主義の言葉流布
（1925（大正14）『女工哀史』出版）
 - 1930（昭和5）1月，武藤山治辞任（退職金300万円）
4月～6月，鐘紡争議（給料4割削減）
津田信吾社長就任 “中興の祖”
 - 1938（昭和13）鐘淵実業株式会社設立 事業拡大（特に中国）

- 1944（昭和19）鐘淵工業株式会社設立（鐘紡、鐘実合併）
 関連工場・事業所は283カ所。紡績だけでなく重工業、鋳業、化学、航空機部品などに及ぶ。（『鐘紡百年史』）
- 1945（昭和20）終戦。外地工場・事業所全部喪失。（国内30数工場のみ）
- 1946（昭和21）鐘淵紡績株式会社の名称に戻る
- 1947（昭和22）武藤絲治社長就任 会社の再建と改革
- 1968（昭和43）伊藤淳二社長就任（1984 退任） 多角化、労使協調
- 2007（平成19）カネボウ破綻

・農村について

4. 紡績企業と教育

・労務管理の一貫 「資本の労務統括機関の一部」 福利厚生 教化

・企業の社会的責任意識（企業の社会的機能の自覚）

共通価値観としてのヒューマニズム、戦後民主主義

十大紡・中小紡の教育—各種学校、公立定時制高校の適応した受け入れ体制に依拠

例：NHK 学園，私立向陽台高校，大阪府立貝塚隔週定時制

*これを教育の平準化といえるか

5. 鐘高の特色

・正規私立定時制高校の形態

・自由入学制から女子労働者獲得のための全入制へ

・貧困理由による高校進学困難者の受け皿

6. 長浜工場1校だけの理由と存続の危うさ

・鐘高の存立への意志—社員・生徒 （文書17，文書24，百年史）

・テストケースとしての存在—継続性而非確定性

7. なぜ鐘高は存続したか

・女子（男子）労働者の学習意欲

・高度経済成長期の年少労働者の不足，求人対策としての存在価値

・高校入学率の向上

・紡績企業の社会的責任意識＝鐘紡の慈恵的温情主義の伝統

8. 閉校1988（前年が鐘紡創立100年）

・高校全入の実現—女子労働者の減少

・紡績産業の変容と労働の質的变化

・長浜工場の操業内容転換

9. 記録の意味？

高度経済成長期前史として紡績女子労働者の記録と企業内教育の実態

教育における平等化への挑戦（格闘）記録

10. 女性労働者の現在

女性労働者の平等は進展したか—基本的地位は変わらず—「女工哀史」は生きている

鐘高卒業生数（入学人数不明）

西暦	元号年度	女子学生	男子学生	学生計	従業員数* (学生含む)	備 考
1949	昭和24年					正式開校。授業開始は1948年
1952	27年度	21	6	27	1,435	
1953	28	46	1	47	1,313	
1954	29	34	4	38	1,208	
1955	30	4	0	4	1,080	
1956	31	32	0	32	1,120	
1957	32	8	0	8	1,006	
1958	33	31	0	31	901	この年から全入制か
1959	34	65	0	65	1,109	(レース織機導入)
1960	35	65	0	65	1,151	
1961	36	74	0	74	1,142	付属施設改造へ。制服制定
1962	37	141	0	141	946	存続危機(織機閉鎖、染色加工へ。配転、女子人員削減)(以後、総合加工工場へ再編。男子3交替)
1963	38	119	0	119	977	(全鐘紡 NHK 学園高校入学)
1964	39	114	0	114	1,063	
1965	40	143	0	143	954	
1966	41	6	20	26	834	
1967	42	173	20	193	830	専攻科設置
1968	43	109	13	122	825	
1969	44	19	0	19	759	
1970	45	72	4	76	769	
1971	46	80	4	84	796	
1972	47	70	1	71	746	
1973	48	81	3	84	784	
1974	49	73	3	76	761	(琵琶湖汚染、公害防止協定へ)
1975	50	57	1	58	715	
1976	51	60	0	60	637	(レース閉鎖、合成皮革へ)
1977	52	58	2	60	562	
1978	53	46	0	46	548	
1979	54	35	0	35	526	
1980	55	32	0	32	508	
1981	56	28	0	28	472	(鐘紡、高卒者採用に)
1982	57	30	0	30	870	
1983	58	23	0	23	789	
1984	59	20	0	20	761	
1985	60	25	0	25	737	入学停止
1986	61	25	0	25	689	
1987	62	7	0	7	681	
1988	63	0	0	0	689	3月閉校

出典：『鐘紡長浜高校史』による。*従業員数は『鐘紡長浜工場65年の歩み』による。*カッコは鐘紡及び長浜工場。

またま近江絹糸の研究をされている上野輝将さんに協力し、資料を見せると「ぜひ書きなさい」といわれました。高度経済成長期の前史としての記録と企業内教育の実態のようなものを書いたのではないかと思います。本書251頁にありますように、「これは、大半の若者が義務教育を終えただけで働かねばならなかったという戦後の社会構造のもとで、10代後期という一生でもっとも活力に溢れ、意欲に満ちた年齢層を主たる労働力として紡績産業において、そうであるからこそ、定時制高校4年間の勉学の辛酸に耐え、真摯に生きた青春の記録」なのです。中学を出ただけで働かねばならない、高校にいけない人がたくさんいた時代です。中学を出た頃は人間の一生の中で一番意欲的かつ元気な時期ではないでしょうか。紡績では労働のピークは3年で、4、5年たつと肩たたきをする状況があるのですが、この時期だからこそ高校を続けられた。女子労働者の側からすればたいへんな努力をして、こういう形で戦後教育の平準化の流れに参加していたともいえるでしょう。

書いていて思ったのは、女性労働者の現在です。ずいぶん変わりましたし、不十分なながらも均等法もでき、平等化は進んでいますが、しかし実際には男女平等が実現したという認識はありません。国会議員の半分は女性にとまでいかなくとも、女性の公職進出の度合いは目標値を半分にしないと平等は程遠い。私自身、1970年代末に京都市の婦人行動計画をつくる協議会の委員をしたことがありました。珍しく女性と男性が半分ずつ委員になり、女性弁護士が会長でした。公職の目標値を女性委員は「50%」といったのに対し、男性委員からは「空論だ。できそうもないことを書いても仕方がない」といわれたことを覚えています。今はどれくらいの数字になっていますか（2014年現在、政府の女性登用目標は、2020年迄に30%）。女性に非正規の労働者が多いというデータは変わりありません。女性労働者の地位は基本的には変わらず、「女工哀史」はまだ生きていないのではないか、というのが私の感想です。

2 質 疑

2.1 『鐘紡長浜高校史』をめぐって

庄司 ありがとうございます。皆さん、この本を読まれていろいろ感想をお持ちになったと思います。それを出していただき、井上さんにそれに答えていただく形で進めてまいりますので、よろしくお願ひします。ところで、資料にある卒業者数は本には出ていませんね。

井上 生徒数が変動しやすいので。とりあえず表にしてみました。『鐘高史』によるものです。会社のありように左右されている学校です。

庄司 この表は、本に収録した方がよかったですね。

井上 入学者数がつかめなかったの。その方がわかりやすいですね。

庄司 全体像がわかりやすくなります。高度成長期に入ってとくに女子生徒の入学者が増えますが、いったん安定するという傾向があるようですね。60年代に入って100名台になっています。

井上 中学卒業の年少労働者を「金の卵」と呼んだ時代になります。鐘紡の京都工場は——梱包に入っていた羊毛がちゃんと毛糸になって出てくるという一貫工場——高野にありました。そこで同級生が学院の先生をしていましたが、奄美大島に1人、中学を出て就職を希望している者がいると分かると人事課長が飛行機で勧誘にいったと聞きました。それくらい年少女子労働者が払底していた。長浜の場合は正規の高校があるということが認知されていて、高校があるから長浜工場に入りたいということでこれだけ集まったのだと思います。

庄司 高野と長浜とはバッティングしないですか。

井上 高野から転動してきた人は、あまりいなかったようです。

庄司 京都市内の中学を卒業して鐘紡に入る場合、高野に入るわけですか。高野の工場は鐘紡ですよ。

井上 山科にもありました。地元からは少ないんじゃないですか。市内の中学から紡績にいくというのは……。

庄司 市内だと高校に進学する？

井上 田舎よりは進学率が高いと思います。中卒は京都の中小企業に就職するのでは。

庄司 男子生徒は特定の時期に集中して入ってますけど、男子生徒は高校に入学してこない、この表はそう読んでいいのですか。

井上 採用がないんです。ところが、表では1966～68年に男子生徒の卒業生が急に増えていますが、全入制と関係があります。生徒は4年で卒業しますので、この時の卒業生は62年から3年ほどの間に入学した生徒です。染色加工工場に変わって、織機、とくに綿織機が廃止になった時期です。もともと男子はそんなにいらぬ。男子の採用が少ないから生徒が少ないのです。

庄司 そうだったんですか。もともと男子労働者が少ない？

井上 紡績の場合は女子労働者が織機を動かすのです。在職中にも男子のいない学年も

ありました。

庄司 そうすると、(本書に登場する生徒の——井上とし注) 新木さん、江見さんは数少ない男子労働者ということですね。江見さんは後の時代になりますが、新木さんは、入学の年次としては62～64年の、男子生徒も結構入っている時の生徒ということになりますか。

井上 新木さんは51年入学です。この頃はややこしく、卒業年度が1年抜けていたりするのは。操業短縮があって、男子も女子も採用しない年がありました。私が就職する前の年も大変な操短がありました。58年の入学はないはずなんです…。『鐘高史』をつくる時にこの辺がややこしくなっています。

庄司 卒業生数ですから入学者数は当然、違ってきますね？

井上史 編集を手伝った者として補足しますと、なぜこの表を本に入れなかったかという、この表の卒業生数は確かなデータがあったわけではなく、卒業者の名簿から数えただけなんです。傾向はわかりますが、本に載せるには無理があるのでは、ということ載せませんでした。

井上とし 『鐘高史』は非常に不備な高校史で、学校としては全入制にするということは大事なことだと思いますが、書いてないんです。定時制は4年制なので、卒業の4年前に入学しているわけです。全入制後の62年に生徒から多くなっていますね。(62年の卒業生数が多い理由は不明)

庄司 全入というのは、全員高校に入るということですか。

井上 そうです。ともかく、入社と同時に全員入れる、そういう制度です。ところが、高校を辞めたからクビを切るということはないみたいです。学校も専用の職員室をつくったり、私がいた頃はなかった体育館をつくったり、整備されていきました。

庄司 他の方がいかがですか、お尋ねしたいことがあると思いますが、遠慮なくどうぞ。

井上 ちょっと想像がつかないと思うんですが、大まかに言って工場の中は1,400人ぐらいの従業員、そして寄宿舎に800人いて、高校に150人ほど通学するという状況です。

庄司 卒業生は少ないですね、井上さんがお勤めになっていた時代の1955年は4名ですよ、何ですかね、これは？

井上 4名というのは、これは採用がなかったからです。1952年に採用がなかったということです。この4名がなぜいるかといいますと、よその工場から高校へ行きたいということで転動してきた人なんです、わざわざ。それと、石川さんという、1955年の綿紡10社ストの記録を書いた生徒もそうなんです、歌声喫茶に行つて会社にマーク

されて、長浜に高校があるからといって転勤させられました。それも含まれますね、この4人の中に。それから、次の年の卒業だったか、長野工場から、3年遅れで「高校へいきたい」と転勤してきた生徒が3名おりました。

庄司 これは時期によっても違うのでしょうか、入学して4年間で卒業できない生徒はたくさんいたんでしょう？

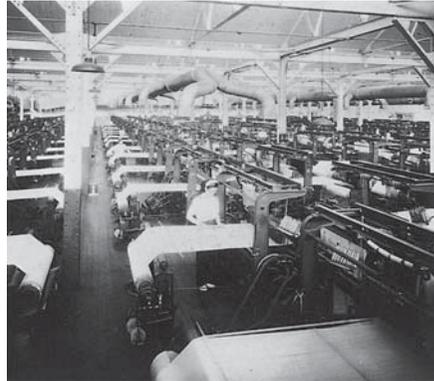
井上 3分の1に減るのです、3分の2が辞め

る。これは不文律でありました。それで私は苦勞するんですが、「しんどい」というんですね。8時間労働というのは聞いて見ますと立ちっぱなしですから。休憩時間はどうしていたんでしょうか。織機がたくさん並んでいて、受持ち台数（機種によるが綿織機7～8台、絹織機は2台くらい）の間を行ったり来たりして、糸が切れると手で直す。石川さんも「8時間は立ちっぱなしで重労働だった」といっていました。加工工場はできた製品を加工したりしますが、そこは少し楽になるんでしょうけど少数で、ここも立ちっ放しです。普通でも学校に行くのは結構しんどいですが、仕事が終わってから学校へ行く——早番は朝4時半に起きて、遅番は10時半まで働いて——それで学校へ通うのはよほど意志強固でないと続けられない。

庄司 ということは、3分の1が卒業していった？

井上 第1回卒業生は10人ほどが5年通学して卒業しています。認可がもらえるだろうと思って1948年に学校を始めました。しかし認可が出たのは49年で第1回卒業生は5年間かかっています。しっかりしていますよ。私は大学を出てすぐ着任しましたがけれど、圧倒されるほど皆がしっかりしていました。

写真2 絹織機工場の内部（年次不詳）



出所：『鐘紡長浜高校史』より。

2.2 敗戦、高度成長と近代家族

西川祐子 この本のおかげでわかったことがたくさんあります。井上先生が1953～56年に教師をされて教えた生徒というのは、中学を出て、鐘紡に勤めて自力で高校に進学するわけです。戦中戦後の記憶によると私たちの世代が中等教育に進学するかどうかは父親が戦争から生きて帰ってくるかどうかによってかなり違うんですね。私には父親が復員する前に「お父さんが帰ってこなかったら、どうするの？」と母に聞くと、弟

が二人いたのですが、「あなたは工場にやっつて第二人を進学させます」と即答がかえってきました。井上先生が教えられた高校生たちは、あの生活綴り方の無着成恭先生が中学校で教えた『山びこ学校』の生徒たちと同じ学年だったのではないかと思います。私も子どもの時、農業と炭焼で生計をたてる山村で生活綴り方を書いている人たちと自分とほぼ同じ年齢なんだという自覚がありました。私が最後に勤めた京都文教大学に鶴見和子さんが蔵書と資料とを全部寄付されました。私は鶴見和子文庫で和子さんが関わっておられた生活記録運動のガリ版印刷の冊子や肉筆原稿に出会いました。子ども時代から何十年か後になって、『山びこ学校』の影響を受けて四日市で生活記録を始めた人たちの資料と出会うわけです。和子文庫資料を整理してシンポジウムを開催した時には、四日市の生活記録グループの人たちにきていただきました。同世代意識の、自分はその後中等教育に進学したわけですから、引け目というのがずっとあったような気がします。

この本の中で、2つわかったということがありました。1つは169頁、生活綴り方の講演に鶴見和子さんと呼んで「誰が呼んだんだ」と叱られるところです。第一に、1954年は鶴見和子さんが生活綴り方と社会運動にのめり込んでいた時期で、そのことを知る工場側のリアクションもあった、このことから鶴見和子さんが全国をまわって種をまく努力をされたことがわかります。第二には、しかしどこでもうまくいったわけではなく、鶴見さんがはげました取り組みが長年つづいた四日市の工場のような事例は決して多くなかったということです。

井上 東亜紡ですね。

西川 井上先生が就職なさった約20年後に、「女子大亡国論」が出るくらい全国に女子大学ができて私も女子大に就職しました。着任してみると女子大には就職課がありませんでした。「なぜ？」と聞くと、「名門女子大なのだから、うちの卒業生は働いたりしないので就職課はいりません」といわれました。女子大にきたので女子大問題が気になって、院生時代からつづけていた女性史研究会で女子大問題を取りあげました。4年制教養型の女子大から、専門性の高い看護大学から、そして繊維工業の工場に付属する短期大学から、教員ひとりずつが出て現状報告をしました。

井上さんが鐘高に就職された20年後には、紡績工場には、同じく2交代、3交代制に合わせて短期大学ができています。高校と短大ができた時間差が20年ある。その間は高度経済成長の時期であった。高度経済成長と学歴社会への変化、そして近代家族のあり方の変化がこのご本からよくわかります。同じ繊維産業の中でもどんどん工場

労働の中身が違ってきますが、さらに大きなエネルギー変化があります。四日市の場合、紡織工業地帯が石油コンビナートになりました。繊維工場の一般的労働者の割合は圧倒的に女子が多く、女子が機械に張りついてする仕事で、男性は機械の点検というようにジェンダーにより労働もふり分けられている。工場全体の労働者の比率と生徒たちの男女比には関連があるのではないですか。ご本から紡績は一定期間の間は女子労働だったということがよく分かります。高度経済成長を考えるすごい資料だなとワクワクして読みました。

井上 男子が非常に減ってくるのは、高卒の採用になって、斜陽の繊維会社に男子が入ってこなくなったからです。男子は3交代労働になるのですから。

西川 フル回転ですね。

井上 女子労働者が減ると同時に男子が比率としては増えてきますが、全日制から雇っても、3交代制ですね。3交代というのは、人間にとっては過酷な労働形態だと思います。

西川 3交代は男子だけですか。

井上 男子だけじゃないですか、私、確認してません。

庄司 労働時間はどうなんですか。

井上 8時間ずつ夜中も働く、ともかく休みなく稼働するわけです。工場は織機がなくなって染色加工工場になると労働の質が変わってきますので、男子の方が適しているということになるのだと思います。それから、短大は、岡山でクラブウがあの辺で他の紡績会社と一緒に運営した短大がありますね。クラブウはやはりある意味では進んでいるようです。名古屋かどこでしたか、交替制にあわせた行きやすい短大を作っていますね。

西川 井上先生は高校は労務管理の一環だとおっしゃいましたが、20年後に工場付属の学校に就職した私の友人もまた「自分の役割は労務管理だった。それが辛かった」と言っていました。

井上 高校は文部省の認可したちゃんとした高校だという気持ちが私たちにはありますが、工場に組み込まれてはいるわけです。だれか生徒が、「先生は会社とうまくやっているじゃないか」というのが（本書に）出てきますね。その通りで、工場のことを考慮しながら運営していたといえます。

鶴見和子さんのことは、私も『思想の科学』を読んで、また塚田満江先生が会員で、先生からもよく聞いてました。生活綴り方をしようと思ったのも塚田先生からいわれ

たからかなという気もします。

西川 もうひとつ、鶴見さんが四日市泊工場で言われたことで、女性労働者が一番に受け取った言葉は、「家計補助労働」でした。あなたたちの賃金が抑えられたのは、そしてあなたたちが親に仕送りをする前提というのは、そういうことでしょうと和子さんがいわれたことを女性労働者がはっきりと受け止めた。1つの言葉が、いかに生活の場での認識を変えるかという事例だと思います。「家計補助労働」という用語はものすごく大きく労働者に響いて、パッと理解された、言葉が投げられた途端にキャッチされたということが、生活記録の中に出てきます。

井上 鐘紡の高校の生徒たちも、ほとんど仕送りをしていたのではないのでしょうか。仕送りしながら貯金して結婚の用意は自分です。男子生徒も仕送りをしています。新木君は「いまごろは親に寄食する子どもが流行ってるけど、僕などは、親を食べささなあかんかった」といいましたね。ほとんどがそういう生徒だったのではないのでしょうか。

庄司 女子労働者の家計補充は戦前からですね。ずっとつきまとったわけですね、戦後も。

井上 長野県では、おばあちゃんも紡績にいていたという生徒がいました。慣習というか。

庄司 岐阜とかも。言ってしまうと、身売りですからね、親が前払い金をもらって。

井上 前払い金は、私の時代はさすがに聞かなかったですけども。

2.3 高卒労働者と労働組合

櫻井重康 高校の教員をやっていたので、身につまされました。家庭事情で進学できないけど、向学心に燃えている生徒たちもいました。大学に夜間に通う気持ちをもっている生徒たちには、それを許してくれる会社に就職をすすめたこともあります。高校の資格をとりたいと思う若者が鐘紡などに憧れて、中学の進路指導の先生も熱心にすすめただろうと思います。素晴らしい実践ですね。先生方がそれを支えた。大きな試みをしてくれたと感謝の気持ちをもったことがよくわかります。この本を3時間くらいで、ふんふんと拝読したんですが、全体としてわかりやすい記述で当時の様子がよくわかって共感しました。新木さんも家に仕送りをしたということですが、農家で貧農だったんですか？

井上 大阪で商売をしていて、疎開で長浜近在にきて、そこでお父さんが病気になられ

なのです。おじいさんやおばあさんもいて、どうしても一家の中心として働かないといけなかったようです。

櫻井 労働組合の性格をどう考えるかお聞きしたい。エリート対ノンエリート、ノンエリートの生き方として新木さん。江見さんは労組の委員長になったと書かれています。会社の中でノンエリートとして生きるというのはいろんな思いもあったと思います。男性の現場労働者たちが高校卒業の資格をえるために入ったが、それが賃金に反映されなかったということですか、そういう記述がありますが。

井上 優秀な生徒が事務員に採用されても、ほとんど給料は上がらなかったと聞いています。会社としては安上がりですね。高卒を採用する場合には一定の給料を出さないといけないのに、中卒からそのままだと、多少昇給していても会社は得しているはずですよ。

櫻井 高校資格をとっても給与に反映されない、会社は認めていなかったということですか。

井上 本社が認めていない。長浜はテストケースで一校しかないのですから。そこだけ卒業したから給料を上げるとなると、他工場で定時制を卒業したのも上げなければならないので、認めない立場ではないでしょうか。

櫻井 機械工、染色工の専門の勉強をして、実際に実技だけではなく、知識も得て、技能的なことも勉強しますよね。しかし、それは会社の中で働く上で待遇に反映されない？

井上 現場の職制にはなっていくでしょうね。その前に鐘紡技術学校へ推薦で入る。鐘紡が男子の中堅労働者を育てるため設けたもので、神戸の近くにありました。入学できると、中堅労働者になれる資格を与えられたことになります。そこへ卒業生を推薦するのですが、女子はないですね。なるべく早く辞めていただきたい、そういう差別をしていたのですね。

櫻井 中堅労働者が鐘紡技術学校へいけば、高卒の資格を得られるのでは？

井上 高校とは関係なく、半年間の鐘紡の私的な学校です。男子は少数ですし、女子は使い捨てです。年次によっては修了後みんな労働組合の活動家になった場合もあって、よほど会社の教育に反発したのでしょうか。普通高校を卒業して入ってくる社員は事務職になりますので、現場の労働者とは給料に差がありますし、鐘高でも卒業したら同じように待遇してくれるのか思っていたら、そうではなかった。それは、相当ショックだったようです。男子の場合は長く工場に勤めますので。女子の場合は、辞めて

結婚しようという気持ちがありますから、それほどには思わなかったかもしれません。

2.4 結婚、郷里との関係

西川 結婚についてお尋ねします。女性労働者は実家のある村の人と結婚するのか、都市に残るのか。高度経済成長期に結婚する相手とともに、どの場所に落ち着くのか。村から出た女性労働者の結婚相手は統計的に、10年刻みで違うと思いますが、この当時は村に帰ると結婚相手がいたのでしょうか。

井上 農家に嫁ぐ人もいますが、農家から出稼ぎに出てきている男性、次男とか三男とかを、同じ職場の先輩などが「弟がどこそこの会社に勤めているから、卒業したら結婚しないか」といって紹介する場合は割と多かったようです。

西川 大都市、中都市で、「同じ田舎（郷里）」をもつ者どうしが結婚するというのですか。

井上 それが多いと思います。農家で、長野でそば打ちの名人になった元生徒もいますが、そういうのは割と少ないですね。中小企業に働く男性と結婚して、畑もしているとか、パートタイムで働いているとかの場合が多いようです。

庄司 一番ケ瀬康子さんの論文（『婦人労働と家族制度——特に製糸女子労働者の問題を例として』『社会政策学会年報』第6集，有斐閣，1989年）では、退職後の本人の希望は、田舎に「帰る」が41%、「帰らない」が5%、「わからない」が36%となっています。実際どうなっているかわかりませんが。

井上 帰りたくないでしょうね。本には工場や高校のひどい状態のことばかり書いていますが、女子労働者自身には家や村からの解放という側面があります。それで「会社の寄宿舎にいた方が楽だった、楽しかった」という面がたくさんあったのではないのでしょうか。

庄司 1953年の論文ですので時代を考えないといけません、田舎に「帰る」が4割を超えていたというのは大きいですね。

井上 私に手紙をくれたり、近づいてくる元生徒はいわば成功例で、割と安定した生活ができていた人たちばかりなので、実際にはそうでない人も多いでしょうから、そこら辺は把握できていません。

庄司 親とすれば、娘を鐘紡の工場にやって高校まで出た。辞めて早く帰ってこいという気持ちをもっているでしょうね。多少の結婚準備をしてあげて、結婚させる…。

井上 いや、結婚の準備はすべて自分でするんです。

庄司 これも一番ヶ瀬論文にあがっているのですが、郡是労組で将来家庭に入るときどこがいいか希望を聞いたものがあります。「農村」が17%、「中都市」が69%、「大都市」が14%です。これから類推すると、長浜は中都市だから彦根、大津あたりで結婚生活をしたいという感じですかね。

井上 男子生徒はたいてい職場の同僚の女子労働者と恋愛結婚します。鐘紡の人と結婚できたらいい方ではないですか。ほかよりは給料もいいし、大企業ですから。その近辺の会社につてがあって、紹介されて、結婚する人が多いですね。私が辞めて家庭に入ってから、たくさんの人から結婚の世話を頼まれました。たまたま一人、紹介して中学教員と結婚したんですが、それを伝え聞いて地元高校卒の事務員も頼みにきました。工場の中の男子は少ないし、会社は外部と交流するのが好みません。民青になられたら困るから、思想的な理由で外と交流することを嫌がります。卒業生も、卒業して2、3年経ち貯金も貯まった、結婚相手がいるかとなると「あの先生に頼んで」と思うのですが、そうはうまくいきません。

庄司 生徒はセーラー服ですか。

井上 工場は作業着で、学校では私服でした。昭和34年ごろ制服で登校を決めたようです。先生も、背広でネクタイをして出てきてほしいと、朝日新聞に取材されています。社宅は近くにありますが、先生まで着替えて出てきなさいというのは難しいでしょうに。

櫻井 カリキュラムでホームルームはないんですか。

井上 そうですね、適宜やっていました。

櫻井 カリキュラムで時事問題があって、生徒が討論するというのは難しかったですか。

井上 生徒会で自主活動しています。

写真3 入学式における歓迎のことば(1966年ごろか)



出所：写真2に同じ。

写真4 生徒会の役員(年次不詳)



出所：写真3に同じ。

櫻井 活発に自分たちの問題を話し合う機会は、生徒会の役員だけでなく、一般の生徒にもあったのですか。

井上 生徒会活動は割と熱心でした。新木君は生徒会長を長くやっていて、私もよく叱られました、生徒の方が大人ですから。

2.5 日本型企業社会の中のエリート

庄司 エリート社員について「良識派」と「功利派」が区分されています。良識派の人が2人、高校存続のため嘆願書を書いて会社に提出してますね。

井上 宮本さん、滝川さん（滝川幸辰の甥）は、2人とも京大卒です。

庄司 嘆願書を読んで立派な文章なので感心しました。単に良識派というだけでなく、ヒューマニティがあったということですかね。それで思ったのですが、昭和20年代は激しい労働運動が起きました。ホワイトカラーとブルーカラーが一緒の組合をつくって労働者の平等処遇を求めて闘います。こういう工職一体の組合というのは一般的に欧米にはなく、日本の特徴なのですが、これが日本型企業社会などといわれる独特の労使関係の成立を規定することになります。もっぱら重工業大経営の話ですが、エリート社員の行動に注目する研究があります。先ほどの西川先生と共通しているのかな、昭和20年代の企業エリートたちは戦争体験があります。それと、出身階級の負い目というか、小学校の同級生が修学旅行にいけない、弁当をもってこれないという成長期の体験も持っています。そういうわけで、欧米のエリートにはない行動になってくるといってえ方を私などはしております。単なる良識派ではなく、人間的な、今のエリートにはない精神構造があるのではないかと思います。ご本に書かれている2人の言動を見てそう思ったんです。宮本さんに関しては、いいわけが上手な、要領のいいところもあったとも書かれています。確かに両側面はあるでしょうが、昭和20年代の、高度経済成長前の社会的矛盾に対応した時代特有の企業エリートの姿を表しているのではないと思うのですが、そんな捉え方をどう思われますか。

井上 あの頃はそういう精神構造の人がいたと思います。今はなくなっているとすれば、残念なことです。戦争体験もありますが、旧制高等学校の教育を受けてきた昔の教養主義。戦後すぐの京大は左翼運動が盛んでしたが、この2人は左翼的ではないという感じを受けました。宮本さん本人は、厭味たらしく批判したりするタイプでした。滝川さんは素朴で人気のある人でした。宮本さんは後に本社の労務部長、その後鐘紡ハウジング社長とかになっています。第1回の卒業生とはよく同窓会をして、一緒に京

都で遊んだりしていたんですが、阪神大震災でダメージを受け、すぐに亡くなられました。滝川さんをご存命ですが、息子さんが元鐘紡労組の活動家で、倒産後は同系列会社に移っていましたが、「父はボケていますから」と近づけたがらないです。これは鐘紡一般にいえることなんですが、会社が倒産した後、生き残りをかけて労組も会社も必死に何かしているのか、外部の人とは接触をしたがらない。現在も元の鐘紡関連の会社を集めて鐘紡労組をつくっていますが、鐘紡の名前が残っているのは花王のカネボウ化粧品だけです。組合員から「なぜ鐘紡労組というのか」と聞かれるようです。何か、ややこしいものは見せたくない、隠しておきたいというのは倒産した会社のせいでしょうか。

庄司 大学を出た、出ないというのは決定的ですか。給与も違う？

井上 全然、違います。多分、賞与で差をつけるのだと思います。戦前から鐘紡は大卒でも給与は安かった、そのかわり賞与が多い。戦前の話ですが、山科工場の工場長などは祇園町に部下を連れて遊びに行けた、それぐらいたくさんの賞与をもらえたという話を聞いてます。戦後も、課長以上は二等車に乗っていました。この頃は、大学出は2年ほど見習いとして各工場の現場に配属されます。自民党代議士だった綿貫民輔氏が慶應を出て長浜工場に来て、高校教師もしていますが、ものすごい人気で、アイドルでした。大卒社員は出身階級がよくて、外見も大体いい。経済的にも余裕があり、生徒にしょっちゅう焼き芋を買って食べさせたりすることができる。男子寮にいて、靴下を洗うのがじゃまくさいからといって、毎日靴下を捨てて替えていたという伝説が残っています。アイドルは将来必ず人事課長とか工場長になって戻ってくるわけですから、労働者も仲良くしておくでしょう。

庄司 工場長は出世コースですか。

井上 はい。嘆願書を書いた宮本さんも滝川さんも、優秀な大卒社員です。一般の労働者との関係を上手にやっていくのも出世の一つの条件ですね。嘆願書を書こうが、組合活動を熱心にやろうが、共産主義者でない限り（たいていは修正資本主義）会社は社員を特別に大事にします。将来の経営者ですから。鐘紡は慶應閥でしたが、60年代の終わりになると、慶應を出て就職する人はまずいなかったでしょう。大卒社員は胸を張って生き、戦争体験や戦後民主主義の洗礼があって、一種のヒューマンズムを実践もできたのでしょうか。労働者の側でも、将来を託された特別な人が共に同じようにやってくれるのを歓迎します。労働組合は係長までは入れる協約で、一緒に活動していました。55年に10日間の大ストライキをしますが、長浜労組副委員長は大卒社員で

した。同じようにデモもするし、闘争もします。

庄司 同じようにするが、格差がある？

井上 昇格しますから。昇格すると組合員でなくなりますね。だから、組合対策を勉強しているのではないかと私は思っていたんですけど。

久保建夫 ご本の79頁に学校の存続について先生や鐘紡の関係者が見事なロジックを展開していきます。そのキーになる社会的貢献というのは地域社会、鐘紡の工場だと、この辺は見事ですが、地域社会と鐘紡を結びつける発想がエリート社員にあったのでしょうか。105頁に、女子労働者である生徒の意欲的な姿とその厳しい労働条件を、どう統一的に評価しとらえようとされたのか、このへんについてももう少し詳しく説明ください。古いタイプの経済学では労働者階級窮乏化論というのがありました。劣悪な状態の労働者がどうして歴史的な革命を生み出す力や英知を生み出すのかとか、カウツキーとかベルンシュタンの時代から議論があって、なかなか解けないんです、今にも通じる話ではないか、105頁はそういうあたりをおっしゃっているのではないかと思います。経済系の月刊誌の編集をやっている時、毎年2月号には春闘の特集号を出していたのですが、そのころはまだ重化学工業が中心の資本の蓄積様式や労働者階級の状態、労働組合の闘い方などがテーマになっていました。労働組合運動の組織化の話になってくると労組幹部の目線ですから勇ましい話か資本の搾取の問題ということが主でした。それに対して、いまの井上さんのお話の目線は、働く人たちの、特に若い女性の生活や家計補助的な賃金など、家族の問題とか、弟たちを進学させるために姉が働いているという、背景の生活にまでおよぶ広がりをもった見方で、労働者の状態がよくわかったとように思います。独占企業の経営分析や労働者の研究会をやったりしていたときには、この点が抜けていたような感じがして、新鮮な学びがありました。「家事労働は価値を生まない」という主婦論争が嶋津千利世さんと男性研究者のあいだでありました。嶋津さんは、労働力の価値分割を提起されて、共働きが賃金を低下させたなどと主張されました。女性労働の分析としてはたいしたものだと思いますが、「主婦労働は価値を生まないから、労働者でない」と世の中を変える力にならない」という論調だったと思います。井上さんの本では女子労働者の背後に家族の問題、農村地帯の問題の広がりがあるんだなど、今まで欠けていたものがつなげたような感じをもちました。この本は読みやすかったと同時に勉強になりました。3年間の教師生活の中で、広がりをもった視野で見ておられたのかなと思いました。

ところで、鶴見さんは上智大学時代に社会正義研究所を主宰しておられて、毎年シ

ンポジウムをやっているんです。そこにインドネシアとかフィリピンとか、当時の独裁国家から亡命してきた人たちをパネラーにしたンポジウムです。70年代の半ばです。日本企業や笹川良一がどんなことをしているのかなどについて、亡命してきた人たちが報告してくれました。それから急に南方熊楠の研究なんかされるようになったのでしょうか。ともかく労働問題の研究のことはあまり知りませんでした。

西川 生活記録をやる前に婦人少年局で調査をかなりやっておられます。その時からだと思います。

久保 妻が鶴見俊輔の教え子で、ハーバード時代の友人のジャーナリストが来日したときなど資料集め手伝ったりしていたようで、いろいろ勉強することができたなどと言っています。

井上 嶋津千利世の『女子労働者——戦後の綿紡績工場』（岩波新書、1953年）が、私が就職した年に出版されるのですが、よく書けているものですし、よく調べてあります。何回も読みましたが、ここに書かれている通りだったら学校なんかへいけるはずがないなという感じがしたのです。しかし鐘高では、元気に4年間学校に通って卒業する生徒がいるのですから、これはどうしてかなと思いました。嶋津さんが書くこともウソではないし、そういう見方をすれば鐘紡も同じ状況にあったと思います。現場のことはよく知らないのですが、しかしそれだけではないな、というのが私の感想です。どうしてこんな状態で学校を続けられたのかと考えてみました。やはり意欲のほかに、元気だったんですね、みな10代後半で。そうとしか思えないですね。戦争中に比べると、食べるものはどんぶりの麦飯にしてもいっぱい食べられるわけで、意欲と活力があったから高校を卒業できたのかな、と。

庄司 工場の中では水蒸気がすごいですか？

井上 そうでした。

庄司 肺によくないものはなくなっていた？

井上 それと汚水を排水していた。74年に公害防止協定を調印していますね。その前は汚いものが出たら琵琶湖へ捨てたら、混ざってきれいになるという感覚です。

庄司 工場から出る蒸気ですか。

井上 織ったものの糊は落とさないといけない、洗って仕上げます。それを琵琶湖に流す。工場から長いパイプが琵琶湖の真ん中に向かって伸びていました。（取水かもしれない。汚水はどこへ？やはり琵琶湖ではないかと）この時代は公害とか考えませんし、琵琶湖汚染の問題が起こってから、公害防止協定を結んでいます。

原山浩介 この本を読みながら、自分が辞典に書いた「集団就職」に関する原稿を思い出していました。集団就職で、遠くに行く形の中卒者の就職が出てくる、その際に家との関係がどうなったのか、例えば子どもから親への仕送りの期待の有無などをみていくと、いろいろな形が出てくるだろうと思います。それらを、若者の移動という形で一緒にたにしてしまったように思います。

「集団就職」という一言で簡単に済ませてしまっていたものを考え直すために、例えば、企業内学校論を真面目に考えた方がいいのかなと思いました。現状では、集団就職に関するいろいろな議論の中で、家への仕送りの話が欠落して、高度成長期の若者の話になっているように思います。

さて、一つだけ質問したいことがあります。この本を書く中で、当時の学校そのものについて考えたことや、当時の思いなど、もちろん本に書いてあるのですが、もし特に印象に残っていることがあれば、お聞かせください。

井上 くり返しになりますが、要するに、やはり驚きですね。若い女の子が、こんなところで働いて、という、それが大きかったと思いますね。私自身が上流階級に生まれたわけではないし、それに学徒動員の経験があるのに、その時、戦争体験は別ものなのです。「平時になって、この労働の有様はなんや」という衝撃だったのだと思うんですね。本当にかわいそうですよ。それに、何ともいえない糊の臭いです。食堂にも工場から臭いをもって出てきます。だけど、それは仕方ないことで、糸に糊をつけておかないと織れないからです。

当時の男尊女卑の社会でも特別にみえるほど、男性がものすごく威張ってました。社員はまさにエリートという感じで。私はちょうどその真ん中辺で、生産にもかかわらないし、経営にもかかわらない、それでかえって客観的にというのか、一歩離れたところから見ていられた、そういう立場だろうと自分でも思っていました。

原山 糊の臭いは働いている生徒たちがもってくるわけですよ。学校や寄宿舎もくさかったということでしょうか。

井上 寄宿舎に帰ったら脱ぎますから。職服は決まっていた。同僚が、学校は労働現場とは違うから、教員だけの職服をつくろうと言い出し、デザインして京都の四条にあった鐘紡の店で紺の服を作ったんです。それを着ていたら、すぐに人事課から工場決められた職服を着てくださいと通告されました。職服は木綿の作業衣で、男も女もズボン。女は紺色、男はカーキ色です。

長浜はズボンでした。スカートは機械に引っかけて怪我をするのでズボンでした。作

業内容が変わってきたのと、60年代に入ってきて労働環境の変化もあって変わったかもしれない。

桐山 私の母も近江絹糸で女学校を出て寮長をやっていたんです。聞いておけばよかったと思います。日記とか、何か記録はつけておられたのですか。

井上 日記は長続きしなくて、あまりありません。学校から出していた文芸誌、新聞も定期的かどうか。ともかく会社が潰れたら、なにもかもすべて棄てるのです。もっと記録もあったはずなんですけど。文芸誌を集めるのに、えらく苦勞しました。在職中のものはもっていましたが、以前と以後がなくて卒業生に頼んで送ってもらいました。

庄司 文芸誌の『あけぼの』は何年から何年まであるんですか。

井上 1950年創刊から、87年終刊までですが、中断があります。創刊号はぼろぼろになっています。

2.6 企業内学校が与える矛盾的側面

庄司 個人的な関心ですが、郡是の女工の回想をまとめた分厚い本があります（『私達の自分史—娘時代に勤務した寮生・教婦・教育係の記録』1989年）。手に入れようと思って探した時期があるんですよ。結局手に入らなくて、確か京都府立図書館で見ました。その回想録を読むと、郡是で働いたことを懐かしみ、郡是に感謝している人が多い。自分が働いた時代を「学びの時代」というか、人生の貴重な体験をした時代として回想しています。自分は郡是にあって勉強した、キリスト教を教えてもらった、行儀作法、教養を身につけられたというわけです。ご本で書かれているように「女工」という言葉を卑下するような感じはあまりない。郡是の元女工の方にも話を聞きました。大正期に但馬の農村から出てきて、郡是で働いたという人でしたが、自分は小学校では優等生だったとあってたのを覚えています。それに対して、鐘紡では女工の意識は矛盾的というか、「女工」という言葉を嫌がって、「女子労働者」という言葉を使う。自分が働いた鐘紡や女工という言葉に対する意識とは違うものがある。これは何かなと思って読ませていただきました。同じ日本レイヨン宇治工場でも女子労働者が何だったか（宇治文化学園、研究会では東洋紡と言いつ間違いをした——庄司注）教育が受けられるようになっていて、そこで教育を受けた女子労働者が後に郡是の女工が書いたような思い出の文章を書いている。高校教師をしている妻からそれを教えてもらって、日本レイヨンは頑張っているな、労働者を搾取するだけじゃない、社会貢献もしていると思った記憶があります。これは鐘高と同じく戦後の話ですが、成功事例ということ

ですかね。

確かに時代は違います。また、郡是の女工は学校で教育を受けたわけではない。日本レイヨンも確か企業内学校ではなかったと思います。しかし、鐘高は高校ですよ、定時制高校になるわけですが、それがもっている女子労働者に与える矛盾的側面があるのではないかと思った次第です。戦後民主主義となって、高校まではいくようになった。まだ高校進学率は低かったというが、もう戦前とは違う。その時代に、いろんな理由があって中学を卒業して鐘紡に入って、その定時制高校で働きながら教育を受ける。社会の中で、そして企業の中でもたされている独特のコンプレックス、こういう言葉は使いたくないですが、意識を植えつけられているのかなと思いました。女子労働者の矛盾的な意識の背景がどこにあるのか疑問として残りますね。

井上とし 企業そのものと教育はもともと矛盾しています。それがあえて必要であるような状況があって、できた高校だと思うのです。『鐘高史』に「よく頑張った。よかった。恵まれた環境だった」と書かれている文章が多いのですが、ここに文章を載せているのは、高校が嫌だった人はいない。ほとんどが「よかった」と思う人ですから、それを差し引いて考えないといけないと思いますが、そこで自分が働いて、自分のお金で、自分の意思で困難な状況にもかかわらず高校を出たことに誇りをもっているんですね。私も使いたくないのですが、コンプレックスの反対かもしれないという見方もあるでしょう。しかし、こういう文章に表れた場合は誇りになります。私は「そんなことで、なんで誇りをもたんなんのかな？」とも思ってしまうわけです。それをものすごく誇りにしたり、人生の支えにしないといけないのは何なのか、もっとほかに誇りはあるはずと、何回も考えてみました。この本を作りながら気を遣っていたのは、「仕送りをして貧しかった」と書かれるのを嫌がるだろうということです。自尊心を傷つけるんですね。確かに貧しかったし、数字を見たら明瞭にわかることなのですが、「貧しくて、ここにきた」と書かれることは認めたくないんですね。何でしょうか。十分に理解しきれていないのですが。心理的分析や一般的人間論で片付けたくない気持ちでいます。

井上史 残された記録や手記を読んでも、大抵いいことしか書いていないけど、本当かな、という印象です。この時代の鐘高生たちは、もっと勉強して賢くなって大学に行こうという意義づけもないし、工場で働くにしても、バリバリ働いて、キャリアウーマンとして、会社社会で頭角を表すことも期待されていない。どちらも期待されていないうえ、ハナから不可能な希望を抱くほど無謀ではない、という境遇、心情を

読み取るべきではないでしょうか。「しんどかったけど楽しかった、よかった」という表面的な声だけでなく、深層の心情を書き残しておかないと、60年前の記録を残しておく意味がないなと感じました。

久保 鐘紡で働いていたことを嫁入り道具にするということは？

井上 結婚もせずに仕事一筋に生きようとか、研究生活に入って生きようということは、ハナから彼女たちにはない。働きながら学校にいて資格をとって、結婚の費用を貯めて、というのが一番のステータスだと思います。働き続けようという基準、環境が生まれてくるのは70年代になるでしょう。そもそも、そういう選択肢がないんじゃないでしょうかね。

久保 裁縫とか料理とかは？

井上 それは文化講座としてありました。

解説

昭和20年代高度経済成長前の日本社会の把握に向けて

井上とし氏のご自身の経験をもとに鐘紡の企業内高校のご本、『鐘紡長浜高等学校の青春』をまとめられたとうかがったので、研究会にお招きして、合評会を兼ねながら同校での貴重な経験を語っていただいた。上はその記録である。

井上氏が大学を卒業し鐘紡長浜高等学校（以下、鐘高）の専任教員（嘱託）に就職したのは、高度経済成長が始まる直前の1953年である。在職期間は約3年半であり、決して長くはない。「でも・しか先生」であったと謙遜しているが、何が本書の執筆に向かわせたかは読者としてまず気にかかるところである。著者は、研究会の最初でも述べたように労働の後に教科書と向き合った女子労働者の姿を歴史に残したからだったと記していた（あとがき）。また研究会の質疑応答の中で、「なぜ高校へ行けなかったのか。親もとへの仕送りもしている。向学心があるのに高校にいけない子供たちに出くわして、社会的な矛盾にはじめて経験した」と述べている。本書は鐘高での短い教師生活の経験をもとに書かれた。鐘高での生活は、それだけ著者にはまばゆい光を放っているのだろうか。だとすればその「光源」はどういうものか、さらにお聞きしたいと思った。

鐘高は1949年に開校し、88年に39年の歴史に幕を閉じた。本書において、対象とされている時期は開校から著者在職時にかけての時期が中心であり、それに加えて「変わりゆく定時制—鐘紡長浜高校の終焉」と題する2つの章で、60年前後以降の時期が概観されている。著者採用前の4年間は鐘高立ち上げ直後の不安定な時期、この間に起こったあれこれについては、現場にいないまでも、著者自身後で耳にし、十分に関心をもったことが推

測される。この時期を含め、著者が実際に見聞した時期が中心であることが重要である。いい意味での対象へのこだわりと適度の距離感は調査研究にとって不可欠である。鐘高という鐘紡がつくった企業内定時制高校で教えるという稀な経験とそれに伴う対象への共感に加え、種々の資料と関係者からのヒアリングをもとにした叙述は、本書の価値を高めている。

研究会ではいろいろな質問・意見が出され、これに対して著者から主に経験にもとづく語りか返されて、結果として貴重な記録をまとめることができた。それは大きく対象時期に関わる問題と、紡績業の女子労働者と企業内高校という対象のとりあげ方の問題に集約されよう。それは、鐘紡長浜工場と鐘高というレンズを通した、昭和20～30年代を中心とする日本社会の描出をめぐる議論だったといえる。

まず、対象時期に関わる問題について補足しよう。昭和20年代は惨憺たる敗戦の余韻さめやらぬ時代であると同時に、高度経済成長期の前史であり、また戦後改革によって日本社会が民主化した時代であった。本書との関連では6・3制など教育が民主化されたことが重要であろう。経済的には第1次産業や中小企業のウエイトが高く、欧米に比べ「中進国」的な産業構造をもち、鉱工業の発展が相対的に立ち遅れている一方、製造業の内部では紡績業が重化学工業に中心的な地位を譲ったとはいえ、なお重要な位置を占めていた。こうした中、大まかにいえば伝統的な社会構造と誕生した新たな社会の交錯がこの時代の特徴だろう。高校進学率も1954年にはまだ50%であり、60%を超えるのは61年である。戦後の教育の民主化によって義務教育年限が延長され、旧制中学教育相当の高校教育の普及が進んだことが重要であるが、高度経済成長開始直前の時期においてさえ高校に進む者はまだ半数しかいなかったのである。当時、高校進学率の地域間格差は大きく、女子労働者の給源地のようなとりわけ貧しい農村部ではもっと少なかった。質疑応答の中で西川祐子氏が述べているように、京都の普通の中学生でも、長女で弟が2人いる場合、父親が戦死したときには、その長女は弟の進学、家族の生活のため進学を断念し働かなければならないような状況があったことが重要である。これに類似のケースは多様な形で多々ありえたであろう。この時代はまだ誰でも高校にいける豊かな時代ではなかったのである。それだけ中間層の形成も薄く、それが本格化する高度成長期とは時代を画する段階差があった。

戦前以来の家計補助的賃金と家への仕送りに象徴されるように、紡績女子労働者と「家」との関係は不可分であった（一番ヶ瀬康子『女性解放の構図と展開』ドメス出版、1989年、原論文は1958年）。一方、鐘高の設立と活動は戦後的価値を一身に体現するものであった。同校は、「鐘紡長浜工場従業員に対し、国の定める教育を受ける機会を、従業員の生活実態に即して与えることによって、教育に於ける機会均等の要請を実現しようとする」ことを目的として、同じく「従業員に対し、平和的且民主的社会的建設的形成者として、有能にして良識ある社会人たるの資質を涵養する」ことを理念として創立された。生徒には、

家の経済的事情のため進学できず、しかし勉学の意欲やみがたく、働きながら勉強できることを理由に鐘紡に入社してきた者も少なくなかった。その点で、鐘紡長浜工場の試みは、時代の要請に応える進歩的側面をもっていたことは確かである。

次に、高度経済成長前の紡績女子労働者の姿を「働きながら学ぶ」労働者の側面で切り取った著者の視点については、慧眼といわざるをえない。もとより近江絹糸の労働者のように「闘う」労働者の姿も現実であり、またこの時代でも「女工哀史」の世界がなかったとは言いきれない。しかし、この時代の女子労働者を歴史的な文脈において性格づけるには、鐘高と女子労働者への着目は重要であり、そのことによって鋭く透徹した研究になったといえる。京都府に限っても、著名な試みとして、「働きながら学ぶ」女子労働者は戦前において「表から見れば会社、裏から見れば学校」といわれた「郡是女学校」が存在したし、鐘高設立とはほぼ同時代にユニチカ宇治工場に「宇治文化学院」が設立されている（1950年、後に京都星雲学院、いずれも京都歴史教育者協議会編『女たちの京都』かもがわ出版、2003年）。鐘高もこうした流れの中にあったと理解される。著者の指摘にもあるように「搾取される」労働者の姿だけでは、鐘高のような企業内高校が設立され、40年近くも存続し、2,000名を超える卒業生を送り出したことは理解できないだろう。

また、著者のいう大学出のエリートの存在と鐘高をめぐる活動、そして対女子労働者間の身分格差・差別の問題は、戦争体験を背負った特殊日本的な企業エリートのあり方をうかがわせる。戦後の日本の労働組合は工職混合組合の形で生まれてくる特徴がある。その背景には職員と工具の共同行動をもって従業員の中の身分差別の撤廃を要求していくという、占領政策にバック・アップされた戦後的イデオロギー状況があった（兵藤釧『労働の戦後史』上、東京大学出版会、1997年）。民主化イデオロギーに戦争体験が加わり、強い平等意識をもち、熱心に組合活動に励む職員のエリートが少なくなかった（たとえば、品川正治『戦後歷程』岩波書店、2013年、金子兜太『語る 兜太』岩波書店、2014年）。鐘紡でも昭和20年代の鐘紡労働組合の委員長クラスを見ると、後に関連会社の社長や重役になっている者が多いので、会社のエリートでもあったことが知れる。

一方、非エリートの世界においては、戦後労働史で研究されているような企業では、男性工具にも終身雇用や年功賃金のルールが適用され、戦争と占領下の構造変化としてブルーカラーの「ホワイトカラー化」という流れができ、これが「日本的」企業システムの形成につながっていく（菅山真次『「就社」社会の誕生』名古屋大学出版会、2011年）。これに対し、本書で取り上げられた鐘紡と鐘高の生徒である女子労働者は、それとはまったく別のコースをたどった日本企業とその雇用のあり方として注目されよう。

本書を読み、著者のお話を直にお聞きしたことをもとにして思い浮かんだことを書きとめてみた。本や話は人の想像力をどれだけ喚起するか、その力の大きさで決まるという勝手な考え方をとっているが、この考えで間違いなければ本書はまぎれもなく好著であり、著者のお話は刺激に満ちたものであった。

追記：研究会のときは気づかなかったが、鐘高の入学者と卒業生の人数をずっと対照すると、時期による変化が顕著であることが注目される。著者が在職していた頃に入学した生徒は3分の1から半数近く中退しているが、そのうち中退者は徐々減少し、やがて70年前後以降になると入学した生徒はほとんどが卒業するようになる。この点は著者も気づいているようで、『鐘紡長浜高校史』（1988年、66頁）に「あけぼの」同校創立10周年記念号の「現在では100%入学し、100%卒業」（石川敏子記、12頁末尾参照。なお、この間の鐘高史の記載は曖昧——井上とし注）の書き込みをしている。創立10周年は1959年、この年の卒業生は31名であり、彼女らが入学したときは46名、また翌年は卒業生65名であり、彼女らが入学したときは83名であった。3分の1とまではいなくても、まだかなり中退者が出ているので石川の記述は正確ではないが、中退者の減少傾向は事実である。これはなぜか。鐘高の歴史を理解するポイントの1つになるかもしれないと思ったので、あえて付言する次第である。

これに対し、本稿初校時に、著者より「井上私見」として次のような意見をいただいた。「1958年の全入制、それに伴い高校への関心・意識、また工場側（高校側）の受け入れ体制の改善があったのではないかと思います」

（庄司 俊作）